

論文の和文要旨

論文題目	日本人高校生の英作文に見る文法特性の発達 (長期的研究)
氏名	村越 亮治

本研究は、日本の英語学習者集団の文法知識の使用状況とその発達について調査したものである。主たる分析対象データは日本人高校生 209 名の 1 年次から 3 年次までの 3 回分の英作文で、そのなかで使われた文法特性を、長期的に調べている。また、後述する追研究で、他の高校の生徒が書いた 3 つの英作文データ 298 名分も分析している。

第 1 章では、学習者の英語学習の指針となる文部科学省の提言・目標設定と、全国規模の英語力調査結果との乖離を示しながら、本研究の目的を明確化している。

第 2 章では、まず、英語学習者の産出言語のさまざまな特性を研究した **English Profile Programme** についての文献レビューを行い、本研究の分析対象となる **CEFR** レベルが付与された文法項目について詳説している。次に、指導・学習のための文法項目がそれぞれの基準でリスト化されているいくつかの資料を紹介している。さらに、文法項目の習得・発達に関わる第二言語習得研究を概観し、後に本研究での結果分析に際して参照する、いくつかの文法項目や分析方法を提示している。最後に、本研究の基盤となっている日本人英語学習者の英作文における文法使用に関する研究を紹介し、これらの先行研究と本研究とのつながりを明示している。

続く第 3 章で、本研究の主たるデータの分析と結果を提示している。データとなる英作文については、段階的な授業シラバスに基づき、年次ごとにトピックもテキストタイプも異なるタスクとなっている。その 1～3 学年次に書かれた 3 つの英作文をそれぞれ分析し、どのような文法項目が使えるようになっているか調査した。まず、**CEFR** レベル (A2～B1) を弁別する基準特性となる文法項目と、中学校検定教科書で目標文法として挙げられている文法項目をリストにした。次に、そのリストを使って、3 年間の英作文のなかの文法項目の使用をチェックし、1/0 の 2 値データを作成した (1: 正確な使用が見られる, 0: 誤った使用が見られる/使用が見られない)。そして、コンピュータ・ソフトウェ

アでラッシュモデルに基づく分析を行い、それぞれの文法項目の項目難易度と学習者の能力値を求め、その分布状況を調べることで、当該学習者集団が使えるようになっていると判断できる文法項目の特定を試みた。結果として、高校 1, 2 年次の英作文データからは、中学校 1, 2 年次の既習文法項目のみが抽出され、高校 3 年次になってようやく、中学校 3 年次に学習した文法項目を英作文のなかで使えるようになっていることがわかった。また、英作文における文構造の複雑さについても調査し、別の側面から文法運用能力の発達を見ることを試みた。前述の English Profile Programme の研究から、異なる CEFR レベルでの数値がわかっている Mean Length of Utterance (MLU) を文構造の複雑さの指標として、その推移を調べたところ、高校 1 年次では A2 レベルにも届かず、高校 3 年次でも A2 レベルの上位にとどまっていることがわかった。しかしながら、Friedman 検定および多重比較によって、1～3 年次で統計学的に有意な向上が確認でき、緩やかながらその発達が確認できた。さらに、流暢さの指標としての作文の総語数と MLU の相関係数を調べたところ、学年を追うごとに、それらの相関が高くなっていることがわかった。同様に、それぞれの英作文タスクと同時期に受験した民間英語試験のライティングスコアと MLU の相関を見たところ、3 年次で弱い相関が認められた。最後に、特定の被験生徒によって書かれた、3 年間の英作文タスクをサンプルとして取り上げ、それぞれに見られる文法特性について詳述している。

第 4 章では、別の学習者集団（高校 1 年～3 年）によって書かれた英作文データの分析による、タスクの違いに起因して使われる文法項目の特定について述べている。この学習者集団は、民間英語試験のスコア比較により、本研究の主たる被験者とほぼ同レベルの英語力を持っていると判断できた。この追分析を行った理由は、主たる被験者は各学年で異なる英作文を書いているため、ある文法項目の使用が、文法知識の発達によるものなのか、特定のタスクで必要とされたためなのか、判然としなかったからである。この集団には、主たる被験者が異なる学年次に書いた 3 つの英作文すべてに、各学年で同時期に取り組んでもらい、3 つの異なる英作文タスクの間で、文法項目の出現状況に違いがあるかどうかを調査した。同じ文法項目リストで、3 つのタスクにおける文法項目の正確な使用の有無を調べて、得られた同じ学習者の 1/0 データのセット（3 タスク×3 学年）を Cochran's Q 検定にかけ、出現が有意に異なる項目を、タスクに依存して出現する文法項目と判定した。さらに、3 つの英作文タスクのそれぞれで、特徴的に高頻度に出現している文法項目を特定した。

第 5 章では、まず、第 3 章で示したラッシュモデルの分析で抽出された経年の文法項目

について、それぞれの出現理由を考察するとともに、最も高い項目難易度を示した項目およびその被験生徒も使わなかった項目について、出現しなかった理由を推察した。また、追研究のデータ（同時に書かれた 3 つの英作文データ）の分析で特定した、各タスクの高頻度項目について、それぞれの出現理由について考察を行った。その後、この追研究でタスク依存であると判断した項目を、主たる被験者の各学年のタスクで抽出された文法項目から除外し、残った項目をタスク依存のない項目としてその経年変化を見たところ、発達傾向が認められた。質的な分析として、特定の文法項目について定型表現的使用から発展的な使用への移行状況を調べたところ、3年間を通じて定型表現的使用が大きな割合を占めながらも、徐々に発展的に使用できるようになっている項目が見取れた。また同じ文法項目でも、文中での働きが発展的に多様化しているものがあることも確認された。さらに、MLU と語数、MLU と民間英語試験のライティングスコアの相関について考察し、MLU の向上が英作文の質的向上にある程度寄与していると推察した。本研究の教育的示唆としては、文法項目は文脈と合わせて教え、さまざまなタスクで使わせることが必要であるということ、学習者のニーズに合った指導のために、学習者の産出言語の発達をシラバスデザインに活かすこと、タスクと文法項目の関連をさらに調査することで、文法項目のチェックリスト方式をより効率的なライティング評価に活かすことが挙げられる。一方、本研究の限界および今後の展望としては以下の点が挙げられる。まず、本研究の被験者は 1 校（ないし追研究対象を含めた 2 校）の高校生で、能力値の範囲はかなり狭いものである。また、今回の文法項目の使用判断は「有るか無いか」であったが、中間言語や使用を試みたうえでの誤用について調べる余地がある。さらに、1 回以上の使用をもって「使える」と判断したが、何らかの方法でより安定した使用を見取る必要がある。英作文データの有効活用という点では、さらなる分析の可能性がある。

本研究の結論を簡潔にまとめると次のようになる（第 6 章）。まず、学習した文法項目が産出言語として自在に使えるようになるには時間がかかるということが、データ分析からあらためて明らかになった。また、文部科学省が卒業時の到達目標とする「B1 レベルの英語力」の一部としての B1 レベルの文法項目は、少なくとも高校 3 年次のはじめまでには、今回の分析手法では抽出されなかった。しかし、文の複雑さを示す Mean Length of Utterance (MLU) については、徐々にではあるが有意に向上しており、書く力の向上への寄与が推察された。